

カラーマニュアル「鳥の病気」の20年のあゆみ

中 村 菊 保^{1,2)}

¹⁾「鳥の病気」編集委員長，鶏病研究会，〒305-0856 茨城県つくば市観音台 1-21-7 サンビレッジ川村 C-101

²⁾(株)新日本科学，〒104-0044 東京都中央区明石町 8-1

要 約

1995年に鶏病研究会30周年を記念して、カラーマニュアル「鳥の病気」第1版が発行され、第1版発行後20年の2015年10月に廃刊となった。今回の廃刊を機会に「鳥の病気」の過去20年間の歩みを述べる。第1版から第8版まで発行され、計17,000部発行された。第1版～第5版では、ワクチンプログラムの改定に合わせて更新した。第6版では“鶏アデノウイルス感染症”、“その他のウイルス病”、“カンピロバクター感染症”、“ダチョウの病気”、“ウエストナイルウイルス感染症”の項を追加した。また、“サルモネラ症”は“家禽サルモネラ感染症(法)”と“サルモネラ症(届)”に分けて、記載した。第8版は、獣医学教育コアカリキュラムにも対応することも目的に、病気の項目とは別に「養鶏産業および飼養衛生管理」の大項目を新たに設け、その中で1. 鶏の分類と品種、2. 飼養衛生管理、3. 鶏の解剖学と生理学、4. 鶏の免疫学を追加した。病気についても、キジの病気について新たに追加した。更に、鳥インフルエンザ、伝染性コリーザ、外部寄生虫症、内部寄生虫症、皮膚の病気、ウズラの病気、鳥クラミジア感染症、小鳥の病気、ハトの病気、ウエストナイルウイルス感染症では執筆者の交代により大幅な内容の変更があった。「診断の概要とワクチネーションプログラム」の大項目の中に、病理解剖の項目を新たに追加した。しかし、8版の様式では、演習問題、達成目標、キーワード等の記載がなく、コアカリ認定は断念した。よって第8版を元に新にコアカリ準拠テキスト「家禽疾病学」を発行した。

キーワード：鳥の病気，廃刊，20年，家禽疾病学

はじめに

2015年10月にカラーマニュアル「鳥の病気」が廃刊となった。しかし、この「鳥の病気」は「家禽疾病学」と名をかえて、継続して出版している(鶏研会報51巻2号巻頭参照⁴⁾)。「鳥の病気」は1995年(平成7年)発行の第1版から8版を数え、20年間で17,000部発行された。単純計算では、年平均850部販売されたことになる。かなりのベストセラーである。私は第1版より編集委員として編集に参加し、2001年4月より湯浅編集担当理事から私が編集担当理事となり、「鳥の病気」第5版(2002年9月5日刊行)の編集委員長に就任して、それ以後編集委員長としてそれらの発行に関わってきた。そこで、「鳥の病気」の廃刊にあたって、第1版から第8版、さらには「家禽疾病学」発行にいたる過去20年間の歩みを述べる。

1. 第1版

1995年に30周年記念として発行され、鶏病研究会会員に無料で配布された。カラー写真が多く、編集および経費の捻出にかなり苦労されたと聞いている。湯浅襄編集委員長(資料1)のもとで、最初の「鳥の病気」が発行された。編集方針としては、第1版の序文に「鳥の病気について広

く知識を得ていただくための簡便な解説書になっています。本書が、会員のみならず多くの関係者の皆様に現場で広く利用されるものとなるよう願っております。」(資料2)とあるように、会員が現場で本を開いて、疾病を診断できるような本ということである。よって、出来るだけ臨床症状や肉眼病変の写真を多く掲載している。写真については農林水産省家畜衛生試験場の写真室の安藤義路さんの協力があつた。安藤さんは日本では珍しい科学写真撮影の専門家であり、執筆者から提出されたカラースライドをすべて取り直し、色調の調整をやっていただいたと聞いている。そのため、たいへん美しい写真が掲載されたカラーマニュアルとなった。執筆者についても、その当時のわが国の最高の家禽疾病研究者の方々(資料1)にお願いした。最初は会員に配布することが目的であったが、好評であり、会員外の方も含めて販売してほしいとの要望があり、販売するようになった。疾病以外にも鶏病研究会で制定した鶏病のためのワクチンプログラムは特に好評であった。ワクチンや薬剤、あるいはそれらの使用方法は年々更新される。これらに対応し、最新のワクチンプログラムを提供するために、1～3年おきに更新した(第1～5版)。

表紙にはリンパ性白血病の肝臓、赤血球凝集反応、トリ白血病ウイルス接種鶏胚線維芽細胞の蛍光抗原、正常な鶏

の写真を使用した（写真1）。表紙のデザインは当時の山口成夫担当理事が行った。ちなみに鶏の写真以外は鳥の病気の中で使用されている写真であった。鶏の写真は私が撮った病性鑑定の鶏である。背景の緑色は、鶏病研究会報の緑色に合わせたものである。なお、本のサイズは手に取って開きやすいB5サイズとした。第1版は紙が厚く（コート紙110kg）、糊がうまく浸透せず、コピー等でページを開くとページが取れてしまうことがあった。

2. 第2～5版

第2～5版の改訂点はワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新が主であり、本文等の内容についての変更はなかった。ワクチンや診断液は、新製品の開発、使用停止などにより、絶えず更新していく必要があった。そこで刊行ごとに更新をしていった。

3. 第6版（全面改訂）

また、執筆者の交代、重要疾病の変化等に対応するため

に、第6版では全面改訂を行った。執筆者の変更、それに伴う本文や写真の変更を行った。全面改訂であること認識してもらい意図で表紙も緑色から青色の表紙に変えた（写真2）。また、第6版ではカラーフィルムからデジタルフィルムが主流になり、保存性の観点からもカラースライドフィルムの写真はすべて電子化した。紙をやや薄くし（コート紙90kg）、糊の浸透を良くし、読みやすいように2段組の様式に変更した。第6版を刊行した当時、わが国での高病原性鳥インフルエンザの発生が問題となっていた時期なので、支部で買い上げて、支部会員に配布したり、一部補助して会員に販売する支部があったと記憶がある。1～3刷りまで行い、計4500部が発行された（表1）。2006年に1、2刷を発行し、3刷は2008年発行した。

4. 第7版

第7版ではワクチンプログラムおよびワクチン一覧を2010年のものに更新し、本文の字句の修正および写真の変更を行った。なお、第7版は2500部印刷された。

表1. 鳥の病気（第1～8版、英語版）の発行年月日、発行部数、編集委員長、内容と変更点

版	発行年月日	発行部数	編集委員長	内容と変更点
第1版	1995.11.1	5000	湯浅襄	30周年記念として会員に無料配布
第2版	1997.4.15	1000	湯浅襄	ワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新
第3版	1999.4.15	1000	湯浅襄	ワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新
第4版	2001.6.15	1000	湯浅襄	ワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新
第5版	2002.9.5	1500	中村菊保	ワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新
第6版1刷	2006.6.30	1000	中村菊保	（全面改訂） “鶏アデノウイルス感染症”、“その他のウイルス病”、“カンピロバクター感染症”、“ダチョウの病気”、“ウエストナイルウイルス感染症”の項を追加。 “サルモネラ症”は“家禽サルモネラ感染症（法）”と“サルモネラ症（届）”に分けて、記載。 これまでフィルムからの画像を起こしていたが、電子化を行った。 本文を2段組の様式に変更。紙も薄いものを使用。
2刷	2006.10.2	1500	中村菊保	同上
3刷	2008.5.2	1500	中村菊保	同上
第7版	2010.5.1	2500	中村菊保	ワクチンプログラム、ワクチン一覧、診断液一覧の更新
第8版	2014.3.1	1000	中村菊保	（全面改訂） 病気の項目とは別に「養鶏産業および飼養衛生管理」の大項目を新たに設け、その中で1. 鶏の分類と品種、2. 飼養衛生管理、3. 鶏の解剖学と生理学、4. 鶏の免疫学を追加。 病気についても、キジの病気について新たに追加。更に、鳥インフルエンザ、伝染性コリネバ、外部寄生虫症、内部寄生虫症、皮膚の病気、ウズラの病気、鳥クラミジア感染症、小鳥の病気、ハトの病気、ウエストナイルウイルス感染症では執筆者の交代により大幅な内容の変更。 「診断の概要とワクチネーションプログラム」の大項目の中に、病理解剖の項目を新たに追加。
英語版	2000.3	550部	湯浅襄	Colour Manual Diseases of Birds Japan International Agricultural Council（畜産技術協会海外技術協力事業部）発行 英国ホートン研究所 Dr. Jane Cook が英文校閲 第3版を英訳。A4サイズ。

5. 第 8 版 (全面改訂)

第 8 版は、獣医学教育コアカリキュラムにも対応することも目的に、病気の項目とは別に「養鶏産業および飼養衛生管理」の大項目を新たに設け、その中で 1. 鶏の分類と品種, 2. 飼養衛生管理, 3. 鶏の解剖学と生理学, 4. 鶏の免疫学を追加した。病気についても、キジの病気について新たに追加した。更に、鳥インフルエンザ, 伝染性コリーザ, 外部寄生虫症, 内部寄生虫症, 皮膚の病気, ウズラの病気, 鳥クラミジア感染症, 小鳥の病気, ハトの病気, ウエストナイルウイルス感染症では執筆者の交代により大幅な内容の変更があった。「診断の概要とワクチネーションプログラム」の大項目の中に、病理解剖の項目を新たに追加した。なお、全面改訂であることを意識してもらうために、表紙の背景を第 1-5 版で使用していた緑より明るい緑色に変更した (写真 3)。表紙の写真のうちの蛍光写真 (トリ白血ウイルス接種した鶏胚線維芽細胞の蛍光抗原) を鶏痘のポリンゲル小体の写真に換え、ロゴマークも追加した。

第 8 版の改定を検討している時期に、ちょうど獣医学教育コアカリキュラム委員会が立ち上がり、獣医大学の教科書を統一する案が提案された。私と佐藤顧問はその当時のコアカリ委員会の委員である東京大獣医学科の尾崎博先生を訪問し、コアカリテキストについての詳しい説明を受けた (資料 3 参照)。尾崎先生によると、最終的にはテキストは電子化し、学生はアイパッドで見ながら授業を受けるとの将来構想を聞いた。「家禽疾病学」のテキストについてのコアカリキュラムが制定された。そこで、第 8 版の内容をそれに合わせて編集するという事になった。よって、第 8 版では養鶏産業および飼養衛生管理, キジの病気, 病理解剖の項が追加された。当初は「鳥の病気」第 8 版を大学での講義用テキストとしてそのまま第 8 版を使用してもらうこと、演習問題は別冊ということで、コアカリ委員会に要望していた。しかし、その時のコアカリ委員長の帯広大学の橋本善春先生より、「家禽疾病学」の名称の使用、達成目標記載、キーワード選定、テキストに演習問題を含むことが求められた。その結果、第 8 版をコアカリテキストとして使用することは断念し、第 8 版を元に「家禽疾病学」を刊行する方針に変更した。2015 年 3 月に「家禽疾病学」がコアカリ委員会よりコアカリ準拠テキストであることの認定を受けた。なお、「鳥の病気」では家禽以外の野鳥・小鳥の疾病、またワクチンプログラムの項があったが、「家禽疾病学」ではこれらは除いた。しかし、鶏病研究会ホームページの会員ページ内刊行物の中にこれらを掲載しているので、参照されたい。

6. 販売

鳥の病気の販売の利益により、改版するための予算あるいは鶏病研究会の事務経費に使用されている。佐藤顧問に

よると、年度のはじめは会費の納入がされないで、事務局の経費を自費で立て替えていたとの話も聞いている。会費以外の予算があることで、鶏病研究会の運営も会費のみの収入で販売数がある程度確保されているのには、全国の獣医大学での家禽疾病学の講義用のテキストと使用されていたのは大きい。とりわけ、わが国で唯一家禽疾病学を付けた研究室 (家禽疾病学研究室, 2005 年より人獣共通感染症学研究室に名称変更) を有した北里大学に毎年テキストとして利用していただいたことが販売数に貢献した。日本食品衛生協会からも 2006 年 (平成 18 年) から継続して購入していただき、その総計は 1502 冊となっている。日本食品衛生協会でも実施されている食鳥処理衛生管理者資格登録講習会でのテキスト「食鳥処理衛生ハンドブック」⁷⁾ 中の「家さん疾病学」を講義するための補助テキストとして使用されている。それ以前は日本食品衛生協会で作成したテキストに鶏病の肉眼病変の写真が掲載されていた。しかしこれらで使用されていた写真は、わが国で食鳥検査が開始するのに合わせて 1998 年厚生労働省で作成された「食鳥検査のための病理学カラーアトラス」⁴⁾ の写真がそのまま転用してあった。私の提供した大腸菌症の写真も掲載してあった。そこで、日本食品衛生協会に写真提供者に了解を得ずに、写真の転用するのは著作権上問題のあることを連絡した。その後日本食品衛生協会では写真については、「鳥の病気」を購入され、使用されている肉眼写真を参考として使うことになった。2006 年に第 6 版が完成したので、第 6 版より使用することになった。

7. 改版の継続

鶏病の専門書では、過去に鶏病診断 (堀内貞治編, 家の光協会, 東京, 1982)⁶⁾, 鶏病病理学カラーアトラス (板倉智敏, 学窓社, 東京, 1988)²⁾, Color Atlas of Avian Histopathology (Randall, C.J. and Reece, R.L., Mosby-Wolfe, London, 1996)⁸⁾ などすばらしい単行書が発行された。しかし、残念ながら現在これらは廃刊となり、新たに手に入れることはできない。一方、米国家禽疾病協会 (American Association of Avian Pathologists Inc.) が発行している Avian Histopathology (Fletcher, O. ed., 3rd edition, 2008)¹⁾ は継続して発行されている。同様に、「鳥の病気」も鶏病研究会が発行しているために、継続して発行してきた。

改版では基本的にはワクチンプログラムを最新のものに更新した。また、細かい誤字脱字等の修正もその時にやったので、かなり頻繁にバージョンアップしている。これができるのも、「鳥の病気」は通常出版社でやる編集業務はすべて鶏病研究会で行い、印刷担当の創文印刷に直接依頼していることによる。また、大学での使用による一定して販売されることによる改版経費の捻出である。他の大学の教科書のように出版社で刊行しているものは、そう頻繁に増刷や改版をすることはとてもできないかと思う。創文印

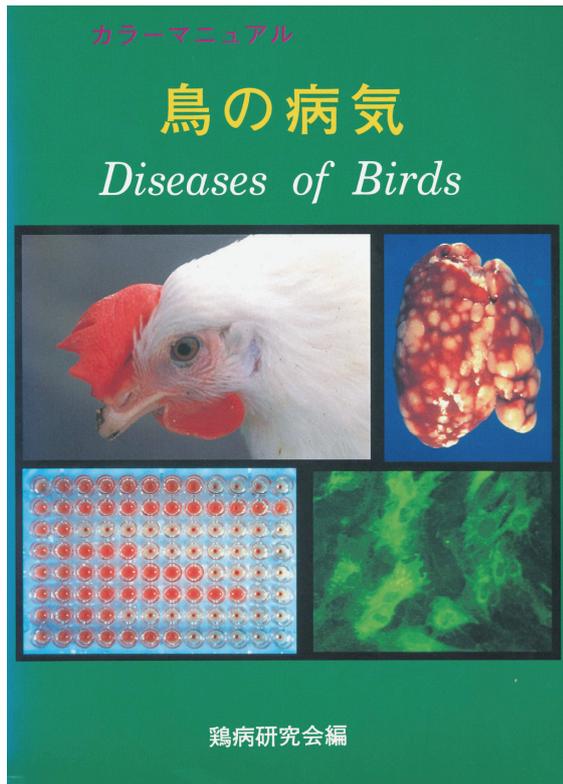


写真 1. 第1版。30周年記念として1995年発行。

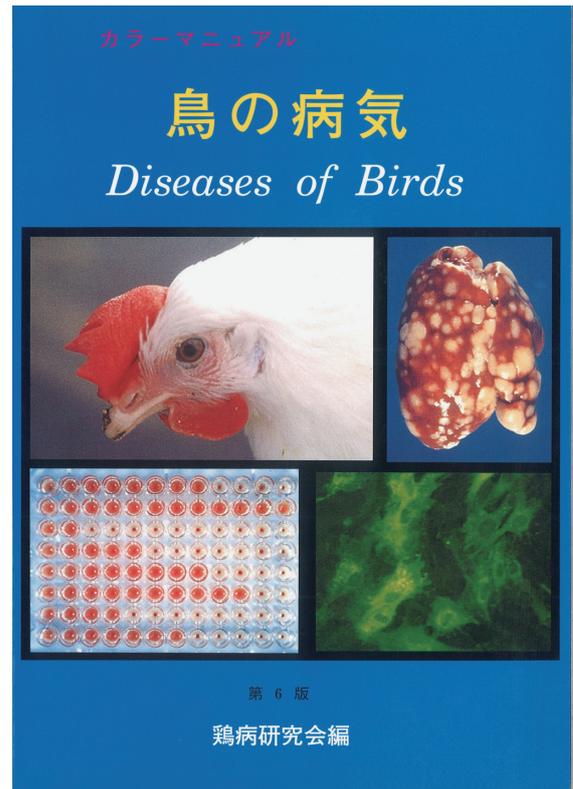


写真 2. 第6版。第6版(3刷)。全面改訂。表紙の色を青色に変更。2006年に1, 2刷を発行し、この3刷は2008年発行。

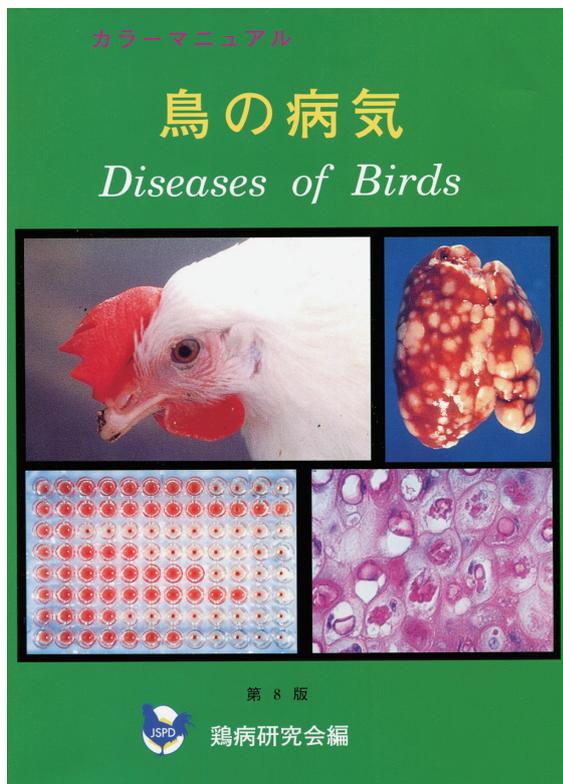


写真 3. 第8版。全面改訂。2015年発行。表紙を第1-5版で使用していた緑より明るい緑色に変更。表紙の写真で鶏痘のポリンゲル小体の写真に変更。ロゴマークを追加。

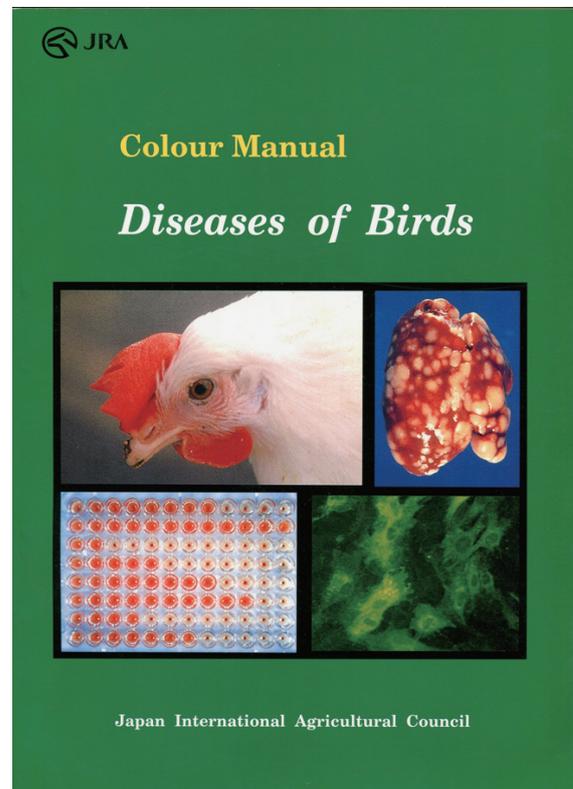


写真 4. 英語版。畜産技術協会が日本中央競馬会の補助を受け、2000年発行。A4サイズ。

刷は単に印刷のみでなく、編集の一部、本の発送までお願いしており、会報および鳥の病気の出版にはたいへん貢献している。また、執筆者についてもボランティアをお願いしており、些少の原稿料のみで我慢していただいている。

8. 英語版

「鳥の病気」の英語版³⁾については、我々も JICA 研修生に鶏病を講義する時に必要を感じていたが、畜産技術協会海外技術協力事業部が中央競馬会から資金をもらい第 3 版の英語版を 550 部作成した。主に JICA の研修生の講義あるいは海外での JICA の活動に利用されたと聞いている。第 3 版を英訳したもので、サイズは A4 サイズと大きくした (写真 4)。英語の校正については当時の英国国家畜衛生試験場ホートン研究所の Jane Cook 博士にお願いした。

9. 著作権

世界的な家禽疾病の専門書である、Diseases of Poultry⁹⁾では、執筆者が変更となっても、以前の執筆者が使用していた写真をそのまま使用していることがしばしばある。我々の「鳥の病気」でもこのようなことができないか考えていた。なぜなら、現在では昔のようにいろいろな疾病があるわけでもなく、典型的な病変や症状の写真を新たに提供することは難しい。第 8 版の改版に際し、執筆者が物故あるいは第一線からの退職等による執筆者交代があった。しかし、彼らの使用されていた鳥の病気での写真は貴重なものが多く、今後手に入らないものも多いので、それらを鶏病研究会へ著作権を移譲していただいた。また、第 8 版の執筆者についても、今後のことも考え、著作権をすべて鶏病研究会へ移譲していただいた。これにより、今後新たな執筆者に代わっても、必要であれば従来の写真を使用できることになった。

おわりに

今後の問題としては、執筆者の交代である。かつては実際に病気を経験した方が執筆者であったが、そのような執筆者は退職あるいは逝去され、新しい執筆者を探すこととなる。単に海外の著書を翻訳しただけの“翻訳本”ではなく、経験に基づく本であってほしいというのが私の願いである。1982 年に発行された「鶏病診断」⁶⁾はわが国で発行された最も詳細な鶏病の本である。現在は廃刊となっているが、未だにしばしば見ることがある。なぜなら、内容は執筆者自身のオリジナルのデータに基づくものであり、決して翻訳本ではないからである。「鳥の病気」の後継本である「家禽疾病学」もそのようであることを祈念する。

謝 辞

「鳥の病気」の発行にたいへん貢献していただいた、湯浅襄編集委員長、編集委員、執筆者、写真提供者、鶏病研究会事務職員、創文印刷の皆様へ深謝します。

文 献

- 1) Fletcher, O. (Editor): Avian Histopathology, 3rd edition. The American Association of Avian Pathologists Inc., Pennsylvania (2008)
- 2) 板倉智敏. 鶏病病理学カラーアトラス. 学窓社, 東京 (1988)
- 3) Japanese Society on Poultry Diseases: Color Manual Diseases of Birds. Japan International Agriculture Council, Tokyo (2000)
- 4) 鶏病研究会. 鳥の病気廃刊と家禽疾病学刊行の案内. 鶏研究会報 51: 巻頭ページ (2015)
- 5) 厚生省生活衛生局乳肉衛生課. 食鳥検査のための病理学カラーアトラス. 厚生出版, 東京 (1988)
- 6) 堀内貞治編. 鶏病診断. 家の光協会, 東京 (1982)
- 7) 日本食品衛生協会. 食鳥処理衛生ハンドブック. 第 3 版. 日本食品衛生協会, 東京 (2012)
- 8) Randall, C.J. and Reece, R.L.: Color Atlas of Avian Histopathology, Mosby-Wolfe, London (1996)
- 9) Swayne, D.E. *et al.* (Editors): Diseases of Poultry, 13th Edition. Wiley-Blackwell, Ames (2013)

Twenty Years of “Color Manual of Bird Diseases”

Kikuyasu Nakamura^{1,2)}

¹⁾Editor-in-chief of “Color Manual of Bird Diseases”, The Japanese Association on Poultry Diseases,
C-101, Sun Village Kawamura, 1-21-7 Kannondai, Tsukuba, Ibaraki 305-0856

²⁾Shin Nippon Biomedical Laboratoris, Ltd., 8-1 Akachi-cho, Chuo-ku, Tokyo 104-0044

Summary

“Color Manual of Bird Diseases” was published as commemorative publication of the 30th anniversary of the foundation of the Japanese Association on Poultry Diseases in 1995. Since then the textbook has gone through 8 editions for 20 years. The history of “Color Manual of Bird Diseases” was reviewed.

(J. Jpn. Soc. Poult. Dis., 51, 237-245, 2015)

Key words : Avian Pathology, Color Manual of Bird Diseases, Japanese Association on Poultry Diseases, 20 years

資料1. 「鳥の病気」第1版編集委員および執筆者

編集委員 (あいうえお順)

安藤義路 (農林水産省家畜衛生試験場)

井上勇 (日本大学農獣医学部)

佐藤静夫 (全農家畜衛生研究所)

志村亀夫 (農林水産省家畜衛生試験場)

谷口稔明 (農林水産省家畜衛生試験場)

中村菊保 (農林水産省家畜衛生試験場)

前田稔 ((財)畜産生物科学安全研究所)

山口成夫 (農林水産省家畜衛生試験場)

湯浅襄 (農林水産省家畜衛生試験場) (編集委員長)

吉田勲 (共立商事 (株) 中央研究所)

執筆者 (執筆順)

平松計久 (株) 微生物化学研究所

喜田宏 北海道大学大学院獣医学研究科

工藤雄一 (財) 日本生物科学研究所

小田切美晴 塩野義製薬 (株) 油日ラボラトリーズ

岡田幸助 岩手大学農学部

日原宏 農林水産省家畜衛生試験場

大滝与三郎 (財) 日本生物科学研究所

吉田勲 共立商事 (株) 中央研究所

川村齊 (株) ゲン・コーポレーション 栃木ラボラトリ

山口成夫 農林水産省家畜衛生試験場

高瀬公三 (財) 化学及血清療法研究所

湯浅襄 農林水産省家畜衛生試験場

八木橋武 (財) 日本生物科学研究所

中村政幸 北里大学獣医畜産学部

沢田拓士 日本獣医畜産大学獣医畜産学部

中村菊保 農林水産省家畜衛生試験場

合田光昭 愛知県経済農業協同組合連合会農畜産物衛生研究所

久米勝巳 (社) 北里研究所家畜衛生研究所

鈴木達郎 千葉県家畜衛生研究所

佐藤静夫 全農家畜衛生研究所

東量一 東京農業大学農学部

井上勇 日本大学農獣医学部

志村亀夫 農林水産省家畜衛生試験場

磯部尚 農林水産省家畜衛生試験場

藤崎幸蔵 農林水産省国際農林水産業研究センター

平詔亨 農林水産省家畜衛生試験場

白井淳資 農林水産省家畜衛生試験場

大槻公一 鳥取大学農学部

手塚和義 丸紅飼料 (株)

前田稔 (財) 畜産生物科学安全研究所

板倉智敏 北海道大学大学院獣医学研究科

大島寛一 (社) 岩手県獣医師会食鳥検査センター

谷口稔明 農林水産省家畜衛生試験場

宮崎茂 農林水産省家畜衛生試験場

船橋史憲 (株) 畜産興農社

竹原一明 北里大学獣医畜産学部

山田進二 (財) 化学及血清療法研究所

平井克哉 岐阜大学農学部

金澤賢二 黒磯動物病院

今井邦俊 農林水産省家畜衛生試験場北海道支場

(所属は当時のもの)

資料 2. 序文 (第 1 版, 第 4~8 版)

＜第 1 版＞発刊によせて

日本の養鶏産業は、外国種鶏導入や配合飼料の量産化などに伴い、1960 年代ころから大規模化、集約化が急速に進み、生産性追求のための合理化、近代化が図られつつ今日に至っております。飼育の大規模・集約化は、伝染病の伝播を速め、病態を複雑にし、また、疾病の発生による大きな経済的被害をもたらします。このような時代の当初は、ひな白痢、ニューカッスル病、マレック病などの伝染病が猛威をふるい、壊滅的被害を受けた農家も少なくありませんでした。その後、鶏病に関する診断・予防技術が進歩し、大きな被害をもたらす法定伝染病を始めとする多くの疾病の発生は、1960~1970 年代とは比較にならないほど減少してきました。これは、技術・知識の発展とともに、それら技術・知識の普及・指導につくされた家畜衛生関係技術者の力が大きかったものと思われまます。

鶏病研究会は 1965 年秋に設立されましたが、鶏病に対する予防手法が確立されておらず、また、鶏病に関する知識・技術が十分普及していなかった当時から今日にいたるまで、会報の発行、技術検討会の開催、専門委員会による問題点の検討等の普及活動を通じ、養鶏産業の発展ならびに安全な家禽生産物の供給に寄与してまいりました。

本会は本年設立 30 周年を迎えることになり、これを機会に、鳥の病気に関する最新の情報を取り入れた本書を発行することになりました。本書は、鳥の病気について広く知識を得ていただくための簡便な解説書になっています。本書が、会員のみならず多くの関係者の皆様に現場で広く利用されるものとなるよう願っております。

本書は鶏病研究会設立 30 周年記念事業協賛会のご支援のもとに発行されるものです。ここに、ご援助いただいた協賛会会長犬伏孝治日本養鶏協会会長ならびに関係各位に深く御礼申し上げますとともに、本事業にご協力いただいた会員に感謝いたします。また、本書の編集ならびに執筆の労をとられた各位に深甚なる謝意を表する次第です。

1995 年 9 月 鶏病研究会理事長 佐藤静夫

＜第 4 版＞発刊によせて

鶏病に対する診断・予防技術の進歩あるいは施設などを含み飼養衛生技術の改善とともに、わが国ではニューカッスル病、ひな白痢あるいはマレック病といった過去に大きな被害をもたらした病気の発生は非常に少なくなってきました。しかし、飼育規模の大型化や集約化に伴う複合感染症、あるいは日和見感染症といわれるような病気が大きな生産性阻害要因となっています。また、高致死性伝染性ファブリキウス嚢病、頭部腫脹症候群あるいは鶏貧血ウイルス感染症などの新しい病気の流行もあります。最近も諸外国では、わが国で 70 年間にわたり発生が確認されていない

家禽ペストの発生が報告されています。このような“新興・再興感染症”といわれる病気が養鶏に脅威を与えています。

一方、食生活の向上あるいは流通の国際化などから、食品の安全性に対する消費者の関心が高まり、養鶏産業にも、安全できれいな生産物の供給が求められています。1990 年には「食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査制度に関する法律」が制定され、食鳥検査によって異常鳥を排除し、安全できれいな食肉を供給することが法的に定められました。食鳥検査では一羽一羽の鶏が検査され、異常があるものを排除しなければなりません。そのため、解剖所見による迅速で的確な診断技術が要求されます。

本書は上に述べた新しい病気を含め、可能な限り多くの鶏の病気を取り上げ、臨床症状や病変のカラー写真を添えて簡潔に解説を加えたものです。さらに、本書では鶏以外の家禽、あるいは小鳥の病気についても記載されています。いずれも、それぞれの専門分野の第一線で活躍されている方々にご執筆いただきましたので、鳥の病気に関する基礎知識を得ていただくためには、簡便で格好のマニュアルになったものと思っております。

読者の対象を広くしたため、少ない紙面に多くの情報を詰め込むよう無理をお願いすることになりましたが、本書のためにご執筆を快くお引き受けいただいた著者の皆様に、心から感謝いたします。

カラーマニュアル「鳥の病気」は、鶏病研究会創立 30 周年出版として 1995 年に刊行されました。〈第 4 版〉では、新しいワクチンの実用化が進んだことから、「鶏のワクチネーションプログラム」の項を改稿しました。

2001 年 6 月 編集委員長 湯浅 襄

＜第 5 刷＞発刊によせて

カラーマニュアル「鳥の病気」は、鶏病研究会設立 30 周年記念事業として、1995 年 11 月 1 日に刊行されました。刊行以来、本書は会員の皆様のみならず、多くの関係者の皆様に現場で広く利用されるとともに、鶏病の参考書として広く利用されてきております。

この間、わが国における鶏病の発生につきましては、急性伝染病の発生は、少なくなりましたが、海外にて発生していた鶏白血病／肉腫ウイルス J 亜群ウイルスによる骨髄性白血病やトリアデノウイルスによる心膜水腫症候群などがわが国においても発生しております。ニューカッスル病は、愛玩鶏や地鶏などで散発的な発生が認められており、2002 年には、採卵鶏、レース鳩およびキジなど発生しております。一方、1997 年には、香港において H5N1 亜型トリインフルエンザウイルスによる致死性の高い鳥インフルエンザが大発生し、分離されたウイルスは、人への感染も起こすものであることが報告されております。2002 年においても香港で同じタイプのウイルスによる鳥インフル

エンザが発生しておりますが、今回の発生群から分離されたウイルスは人への感染性はないとされています。鳥インフルエンザはアメリカ合衆国等世界の各地において発生しており、わが国への侵入防止が緊急の課題となっております。

本書は今回で5刷となりますが、新しく増刷するごとに、ワクチン総合プログラムなどの改訂を行ってきました。今回もその後に開発されたワクチンなどを加筆しております。

病気の発生予防には、病気やワクチンに対する正しい知識とともに、日頃からの衛生管理が大切です。そのため、本書が、鶏病の解説書として引き続き、広く役立てていただけることを願っている次第です。

2002年9月 鶏病研究会理事長 谷口稔明
編集委員長 中村菊保

<第6版>発刊によせて

カラーマニュアル「鳥の病気」は、鶏病研究会30周年を記念して、1995年に本会が出版いたしました。本著は鶏を中心にウズラ、アヒル、ガチョウ等の家禽、さらに小鳥を含めた、「鳥」の病気について、第一線の研究者によって、できるだけ簡潔に記載されています。刊行以来、たいへん好評で、本書は会員のみならず、養鶏や食鳥処理の現場、衛生管理等多くの関係者の皆様に広く利用されるとともに、家禽や鳥類の衛生管理や鶏病の参考書として大学教育等にも広く利用されてきております。

「鳥の病気」は刊行以来、すでに、ワクチンプログラムの変更に伴い、内容を更新しつづけ、5版を数えております。しかし、刊行後10年を経て、病気発生状況の推移、病気や病原体についての新情報などが加わるとともに、2004年にはH5N1亜型の今日独ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザが、また2005年にH5N2亜型の弱毒ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザが発生しました。これらの鳥インフルエンザの発生は、鶏の健康のみならず、ヒトへの影響が大変懸念され、鶏卵や鶏肉の安全性が問題となりました。また、鶏と人ともに感染を起こす病気として、高病原性鳥インフルエンザ以外にも、ウエストナイルウイルス感染症が米国で大きな問題となり、わが国への侵入に対する警戒が緊急となっております。このほかにもサルモネラ、大腸菌、カンピロバクターなどによる食中毒の防止も重要な問題であります。卵や鳥肉などの家禽生産物を食品として利用する場合には安全性の問題は切り離せないものですから、生産段階での衛生対策は極めて重要となっております。そのためには、鳥の病気に関する最新の知識や技術の習得は、病気を正しく理解することが必要となります。鳥の病気の中には高病原性鳥インフルエンザやニュー

カッスル病のようにまん延すると大きな被害を与える病気が多いこともあり、早期に発見し、早期に防圧することが大切です。

このような背景のなか、本書に対しても大幅な改訂の要望が聞こえておりました。そこで、このたび本書の全ての内容について見直しをし、最新の情報に更新しました。さらに、病気の発生動向や食の安全・安心の面から今回新たに、「鶏アデノウイルス感染症」、「その他のウイルス病」、「カンピロバクター感染症」、「ダチョウの病気」、「ウエストナイルウイルス感染症」の項を追加しました。また、「サルモネラ症」は「家禽サルモネラ感染症^(法)」と「サルモネラ症^(福)」に分けて、記載しました。

病気の発生予防には、病気やワクチンに対する正しい知識とともに、日頃からの衛生管理が大切です。そのため、本書が、鶏病の解説書として引き続き、広く役立てていただくことを願っている次第です。

2006年5月 鶏病研究会理事長 谷口稔明
編集委員長 中村菊保

<第7版>発刊によせて

カラーマニュアル「鳥の病気」は、鶏病研究会30周年を記念して、1995年に本会が出版いたしました。本書は鶏を中心にウズラ、アヒル、ガチョウ等の家禽、さらに小鳥を含めた、「鳥」の病気について、第一線の研究者によって、できるだけ簡潔に解説されたものです。

刊行以来大変好評で、会員のみならず養鶏や食鳥処理の現場、衛生管理等に携わっている多くの関係者の皆様、また、家禽や鳥類の衛生管理や病気の参考書として大学教育等に広く利用されてきております。

「鳥の病気」は刊行以来、新興感染症の出現等による流行疾病の変化、新規の製造販売承認ワクチンの出現等に伴い、掲載疾病およびワクチンプログラム等の内容を更新し続け、すでに6版を数えております。6版では、ワクチンプログラムやワクチン一覧は2005年時のものを掲載していましたが、今回7版では、ワクチンプログラムおよびワクチン一覧を2010年のものに更新しました。また、本文の字句の修正も加えたものです。

病気の発生予防には、病気やワクチンに対する正しい知識とともに、日頃からの衛生管理が大切です。そのため、本書を、鶏病の解説書として引き続き、広く役立てていただくことを願っている次第です。

2010年5月 鶏病研究会理事長 山口成夫
編集委員長 中村菊保

<第8版>発刊によせて

カラーマニュアル「鳥の病気」は第1版が鶏病研究会

30 周年記念として、1995 年に出版されました。本書は鶏を中心にウズラ、アヒル、ガチョウ、ダチョウ等の家禽、さらに小鳥を含めた「鳥」の病気について、第一線の研究者によって、できるだけ簡潔に解説されたものです。鶏病研究会会員のみならず養鶏や食鳥処理の現場、衛生管理等に携わる多くの関係者の方々、また家禽や鳥類の衛生管理や病気の参考書として大学教育等にも広く利用されています。「鳥の病気」は刊行以来、新興感染症の出現等による流行疾病の変化、新規の製造販売承認ワクチンの出現等に伴い、掲載疾病およびワクチネーションプログラム等の内容を更新し続けて、すでに 7 版を数えています。

今回の 8 版では、病気の項目とは別に「養鶏産業および飼養衛生管理」の大項目を新たに設け、その中で 1. 鶏の分類と品種、2. 飼養衛生管理、3. 鶏の解剖学と生理学、4. 鶏の免疫学を追加しました。

病気についても、キジの病気について新たに追加しました。更に、鳥インフルエンザ、伝染性コリザ、外部寄生虫症、内部寄生虫症、皮膚の病気、ウズラの病気、鳥クラミジア感染症、小鳥の病気、ハトの病気、ウエストナイルウイルス感染症では執筆者の交代により大幅な変更がありました。

「診断の概要とワクチネーションプログラム」の大項目の中に、病理解剖の項目を新たに追加しました。また、ワクチネーションプログラムおよび鶏用ワクチン・診断液は 2014 年の最新のものに更新されました。

病気の発生予防には、病気やワクチンに対する正しい知識とともに、日頃からの衛生管理が重要です。そのために、本書を鶏病の解説書として引き続き、広く役立てて頂けることを願っている次第です。

2014 年 3 月 鶏病研究会理事長 山口成夫
編集委員長 中村菊保

資料 3. コアカリ教科書についての話し合い

日時：2012 年 5 月 14 日 (月) 午前 11 時—12 時

場所：東京大学獣医薬理学教室

参加者：尾崎博（東京大学獣医薬理学教室教授、共通テキスト編集委員）、中村菊保副理事長、佐藤静夫顧問（参加が予定されていた家禽疾病学コアカリ委員の高瀬公三氏は飛行機が不通のため不参加）

・中村よりこれまでの経過を説明した。「鳥の病気」は鶏病研究会の会員（とくに家畜保健衛生所の職員）が鶏病の診断のために、鶏病研究会が独自に創文印刷に依頼して出版している。また、獣医の学生の教科書としても大学で使用してもらっている。家禽疾病学のコアカリ準拠教科書に認定してほしい。また、演習問題等は別冊で対応したい。

・尾崎先生より下記のような話があった。

→別冊での対応でなく、1 冊にしてほしい。コアカリ教科書の申し合わせ事項は資料 1 の通りである。

→基本方針に沿って教科書が作成されていれば結構である。それ以外は各分科会や団体によって異なってもよい。コアカリに指定されていない項目について記載する場合には、該当する項目毎に指定されていない旨を明記した上で掲載できる。

→価格設定は学生が買えるくらいの 4000-5000 円程度 (200 ページ程度) 考えている。

→印税の 10% をコアカリ委員会に納付するとなっているが、あくまでこちらの希望であって、必ずしもそうならないかもしれない。各分科会でもいろいろ議論がある。

→当面は、紙媒体で作成するが、将来的には（できるだけ早く）、電子化していきたい。学生はインターネットで支払、認証番号を取り、教科書をダウンロードする。それを、リーダー (ipad のような) で開きながら、講義をうける。教科書をすべてリーダーに入れば、紙がなくてもすべての教科が受けられる。なお、印刷したものがほしい場合には、1000 円追加するとプリントインデマンドで印刷できる。なお、電子化のメリットとして、紙媒体のような在庫が不要となる。また、誤植は、速やかに訂正できる。ただ、作成に当たり、カラー写真が多いと重くなるので、必要数に制限する方がよい (テキストに掲載されていない写真を学生が見たい場合には、参考資料の索引から、ランシステムで閲覧できるようにする。さらにテキスト中の専門用語の解説についても獣医学事典とのリンクを可能にするよう、現在、大日本印刷が検討中である)。

→これから、紙媒体を作るのであれば、今後のこともあるので、E-pub in design などのアドビソフトフェアで編集できるように出版社に頼んでおくとよい。一度、出版会社の人を私のところに寄越してほしい。

→現在は教科書を 3 割くらいの学生が買っている、電子化すれば 10 割が買うようになる (閲覧権は紙媒体の教科書のように後輩等に譲渡することはできないので)。学生期間中に教科書が改訂されても、学生は新しい改訂版にそのまま更新できる。卒業すると使用できなくなる。

→教科書に演習問題がついているのは、これができれば一応獣医師の仮免許を与えられたということにするため。5、6 年生で獣医臨床実習を受けるのに、免許をもっていない学生が医療行為を行うことは問題であると批判があるので。→コアカリ委員会に事前に教科書を提出してもらえば、審査し、問題なければ承認する。獣医学共通テキスト編集委員会認定の表示およびロゴマークを表紙につけることを許可する。

→コアカリ教科書と違って詳しく記載された、従来の教科書は今後も参考書として生き残るのではないか。これは各分科会等にまかせる。